

中村欣一郎市長の

山椒は小粒でも...

Vol.81

その常識、ホント？



今年は格段に長く暑い夏でした。

「地球が沸騰している」という表現もあながち大げさではありませんでした。このまま秋がなく冬が来るのか、秋が冬に書きかわり冬そのものがなくなってしまう予感すらあります。

天気予報では、熱中症に備えて「こまめに水分補給を」と繰り返されました。この言葉を聞くたびに思い出すことがあります。中学の頃のクラブ活動です。

当時「練習中は水を飲むな」というのが常識でした。それは私の所属していた軟式テニス部だけの話ではありません。一緒にグラウンドで練習していた野球、ソフトボール、陸上などすべての部活動がそうでした。加茂中学校グラウンドの横を鳥羽河内川が流れていきます。柵の外へボールが出ていくと、それを追いかけてこれ幸いと川へ入り、ついでに川の水

を飲む子もいました(私はしていませんが)。そうした我慢もあって、練習後に飲む水道水のおいしかったこと、蛇口脇にあった安っぽいアルマイトのカップと、そのまた安っぽいカランという音が懐かしく思い出されます。



今は降りられなくなった鳥羽河内川

それはさておき、いつたいあの我慢は何だったんだろうか、と思います。平安時代や鎌倉時代のことならいざ知らず、わずか五十数年前のことです。人類が月へも行って帰ってきた後のことです。「人類の進歩と調和」というテーマで70年大阪万博も開催されたころの話です。『巨人の星』や『サイン

はV!』『柔道一直線』などの根性をテーマにしたスポーツ漫画やドラマが流行っていたことも重なります。まだ身体が出来ていない年齢にも関わらず、せつせとうさぎ跳びもしました。肩を冷やすからと野球部は泳ぐことも我慢しました。

少し昔のノスタルジーに浸ってしまった感もありますが、今回書きたかったのは、今の時代もこんな間違ったことをしていないだろうかという心配です。単なるきびしい練習ならまだしも、子どもたちの将来をダメにするトレーニングや、命すら落としかねないとなると大変です。

スポーツのトレーニングを例にお話ししましたが、別の分野でも顧客へのサービス、各種ハラスメント、働き方など、自分だけは絶対に間違いないと思っている人が一番危ういかも知れません。私も気をつけたいと思います。



カゴ一杯もボールがあるなんて、今の部員がうらやましい



Vol.232

教育委員会生涯学習課

☎ 1268

識字(しきじ)について

識字とは、文字を読み書きする力のことです。国や一定の地域における、文字が読み書きできる15歳以上の人の割合を識字率と言います。

9月8日は国際識字デーでした。世界中の国々や人々に、識字の重要性を訴えること、世界の識字率を向上させることをねらいとして、国連教育科学文化機関(ユネスコ)が制定しました。教育制度が整った先進国では当たり前のように見える識字。しかし、世界を見渡した時、文字を読み書きできない人は数多く存在します。現代においても満足な教育を受けられずに文字の読み書きができないまま大人になった人の数は約7億7300万人(世界の15歳以上の約7人に1人にあたる人数)にのぼります。また、発展途上国ほど識字

率が低いことも問題視されています。その原因として、貧困・差別・戦争などによって教育環境が整っていないことがあります。また、識字率の低い地域では、宗教や風習、価値観から女性の識字率が低い傾向があります。

日本の識字率は、ほぼ100%とされていますが、実際には、いろいろな理由から学校に行けず、教育を受けることができなかった人もいます。生まれた年代や環境、差別などを理由に十分な教育を受けられず、読み書きが困難な人も存在するのです。

「国連の人権教育の原点は識字にある」とも言われます。国連で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)でも教育や識字率の問題は取り上げられました。目標4「質の高い教育をみんなに」には、教育を受ける機会を失った人たちの識字率アップも目標に含まれています。

1人でも多くの人が関心を持ち、向上のために取り組めば、文字の読み書きを理由に生きづらさを感じる人も減ることでしょう。その結果として、目標4の達成にもつながります。